

# 身近なまちの風景物語(15)

## 密かな境界

まちを歩くと、気づかぬうちに様々な境界をまたいでいる。目に見える境界、たとえば隣地との境界もあれば、目に見えない境界もある。

境界は至る所にある。ただあまり意識していないかもしれない。

車を運転していると、「ようこそ〇〇県へ」とか、「またお越しくささい△△市」とかの案内板を目にする。最近のカーナビでは、音声で「□□県に入りました」とのアナウンスもある。こうした幹線道路の県境や市境はわかりやすい。

神社の鳥居や寺院の山門は結界として、視覚的にも、行動的にも、身体性を帯びてその境界を感じる。これもわかりやすい。

通りを歩いて、ある交差点を過ぎると、ゴミ集積所にまだゴミが残っていることがある。その交差点が、ゴミ収集車の移動ルートの境界になる。

商店街のアーケード屋根が、途中からなくなることがある。よく見ると、商店街の名前が違っている。ある地点を境に、別の商店街組合になっていた。

こうしたことは、そのまちに住まう人たちにとっては生活の一部かもしれない。一方、部外者にとっては意識しないと気づかないし、多くは気づかないままにいる。

あるまちで、道端に細い竹が突き立てられているのを、ふと目にした。ひっそりとして目立たない。そのまちには何度も訪れていたが、初めてその存在に気づいた。

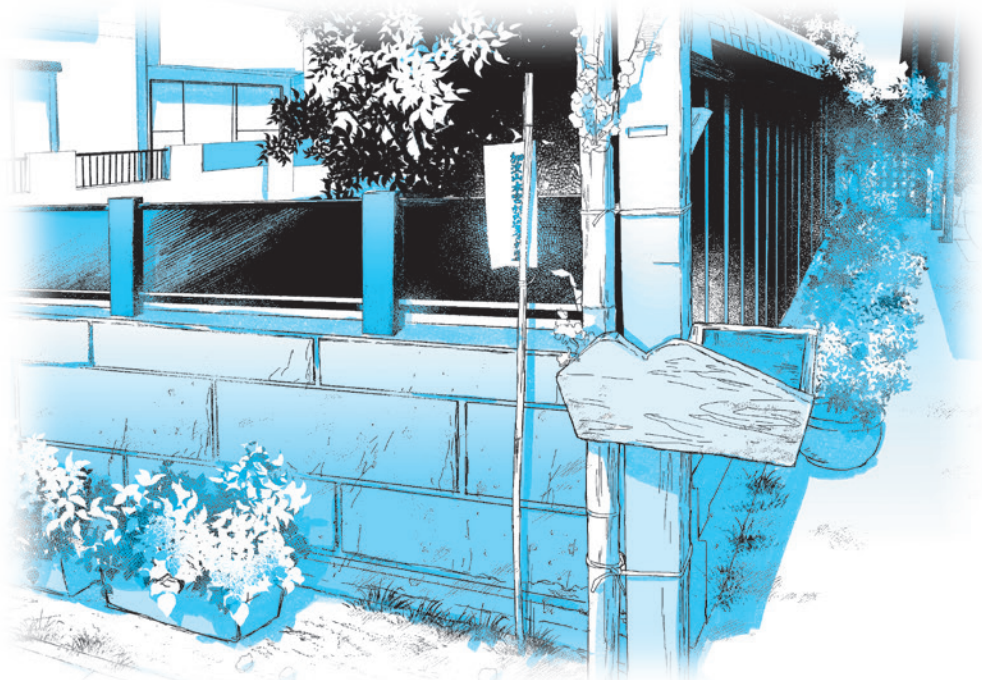
何だろう。気になった。それが何なのか、地元の方に聞いて、ようやくその意味するところを知った。

「辻札<sup>つじふだ</sup>」というらしい。縦に割かれた部分に、町の安寧を祈願するお札が挟まれている。その場所は町の境界だった。祭りの時、町の山車<sup>だし</sup>はその境を越えることはできないという。

これは住まう人たちが知る町の守り神であり、町のゲートなのである。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学芸術専門学群4年）